

【特集・コロナ期をふりかえる】アンケート コロナ期を経験した学校について

◇全て複数回答による結果 ◇広報実務委員会にて考察
◇回答期間：2024年12月末～2025年1月中旬

回答者学校種別

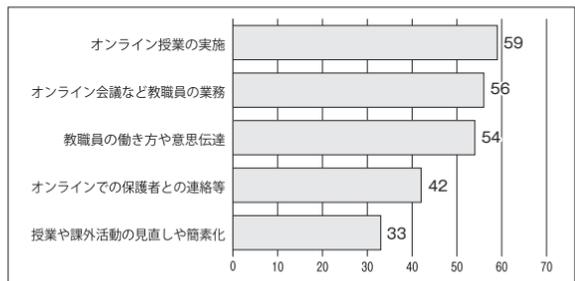
小学校	11	大学／短大／ 専門学校	30	その他	6
中学校	30			合計	77

その他：特別支援学校、各種学校、法人一括回答など

回答者職位など

校長、部長	35	事務局長・部長	3
校長・学長	1	総務部職員	3
学長	2	教務部職員	4
教頭、副校長	14	宗教センター室	2
宗教・聖書科	6	その他職員	3
その他教員	4	合計	77

1 コロナ期を契機に変化した学校運営のシステムなど



<その他の意見より抜粋>

- ・式典、年間行事を変更。
- ・寮の閉鎖、生活形態が変わった。
- ・オンラインによるレポートの授受や出願。
- ・ペーパーレス化が進んだ。
- ・ICTを苦手とした職員にも活用が広がる。
- ・BYOD（個人デバイスの業務使用）が進む。

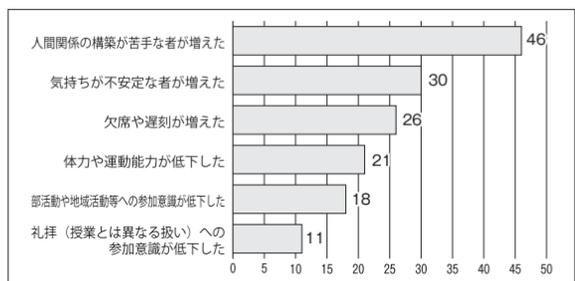
2 前項に係わる具体的な事例はありますか <回答より考察>

校種を問わず各学校の回答に共通していたことは、コロナ禍の中で「密を避ける」取り組みである。そのために、オンライン環境の導入を進めた点が共通しており、そのツールには、Microsoft Teams、Zoom、Facebook、Google Workspace for Education Fundamentals、Google Classroom、G-suite、Webex、BLENDなどが挙げられていた。活用方法としては、連絡手段、保護者面談、オンライン会議、授業・教材の配信、課題提出、学内行事のオンライン配信との答えが多かった。

また、オンライン教育の推進や1人1台端末導入をコロナ前から進めていたため、スムーズにオンライン環境を整えることができたという答えもあった。おそらくオンライン環境の導入には、コロナ前の状況に各学校で既に差があり、その導入のスピードに差が出たのではないかと分析することができた。

最後に、他の設問とも重なると思われるが、オンライン環境の導入が教職員間、対生徒・保護者との関係性の希薄さを生んだ。逆に業務を効率よく進めようという機運が高まったとする回答もあった。

3 コロナ後の児童・生徒・学生の心身の変化

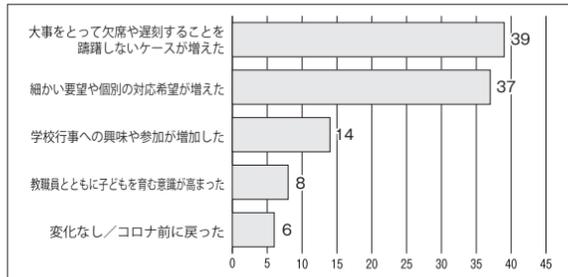


<回答より考察>

約6割の学校が、他者との距離感が測れず、円満な人間関係を築ける者が減ったと回答した。これはコロナ禍で対面による授業や課外活動ができず、友人等と協働したり、衝突したりする機会が乏しかったことに起因する。また約4割の学校が、コロナの蔓延とそれに伴う生活の制限によって、気持ちが不安定な者が増えたと回答した。常に何かに気を付けて大人しく無難に過ごしたり、逆にあえて明るく過ごしたり、自分らしく自然体でいられない者たちが見られた。更に3割以上の学校が、欠席・遅刻が増えたと回答した。これはコロナによる体力や気力の減退、自ら学ぼうとする能動性の減衰が要因である。

一方で、体調不良と言えば怒られずに休める、個別に対応してもらえるコロナ禍の状況に慣れて、戻せずにいる者が多いという指摘もある。課外活動や礼拝への参加意識は、それほど低下していないが、学生主導の大学の部活動では、部の継承が難しくなっているものもあるようだ。礼拝では、感染対策の影響で、讃美歌の歌声が小さくなったとの指摘があった。

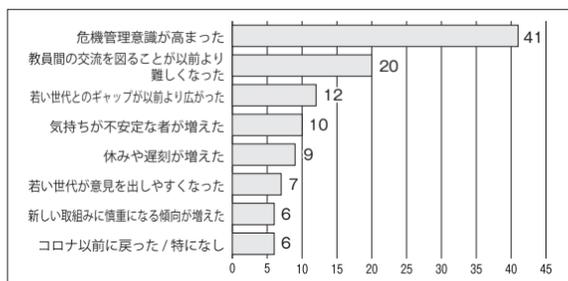
4 保護者・保証人の考え方や行動



<その他意見より抜粋>

- ・子どもが家庭で漏らす学校への不満をダイレクトに苦情として訴える保護者が増えた。
- ・起立性調節障害や適応障害等で不登校もしくは登校渋りの生徒の保護者から、オンライン授業実施の要望が増えた。（実施はせず。）
- ・学校行事に対し、とても関心のある／ない親等に二極化するように感じる。特にコロナ最盛期には急に私立中学受験を決めた家庭もあったせいか、（良い意味だけでなく）全て学校にお任せで無関心な家庭もあると思う。

5 教職員の変化について

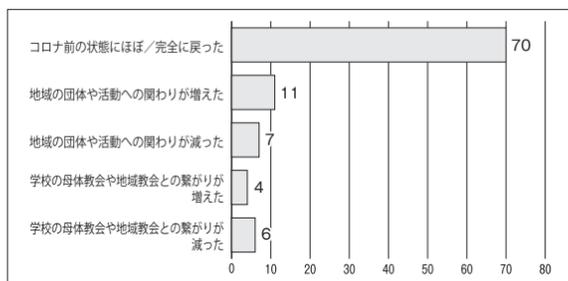


<回答より考察>

教職員の危機意識が高まったという肯定的な意見が多かった。クラスターが起こったり、休校も体験するなど、不測の事態にチームワークの高さを実感したという意見も見られた。また、ICT機器の急速な普及がオンラインの活用を促進したこと、オンライン化できる手続きはオンライン化するなどの効率の良さがコロナ禍後も生かされているという意見もあった。

一方、教職員のコミュニケーションを図ることが難しくなった、若い世代とのギャップが以前より広がったという否定的な意見も多い。対面での会議や話し合いが少なくなったため、それまで顔をつき合わせて全員で考えて物事を決めたり、学年などで生徒指導に当たってきたものを、生徒指導担当者や管理職に任せるようになり、学校全体の教育力が落ちたことを挙げる意見も散見される。特に若い世代の教員とはコロナ禍で黙食となり、一緒に生徒や行事のことなどを話題にしながら食事をする機会もなくなり、なかなか教員の輪に入りづらくなったことも一因と思われる。

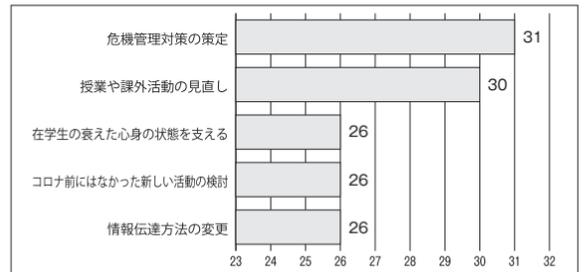
6 対外活動について



<その他の意見より抜粋>

- ・現在コロナ期以前の状態へ戻そうとしている。
- ・対面だけでなくオンラインの利用も含めると全体的には増加と言える。
- ・集会の際、生徒間の距離をとる癖が残った。
- ・修学旅行は海外から国内へとシフトした。
- ・コロナ前のように、海外研修への積極的参加者も増えているが、情勢が不安定な地域もあり、以前と同じ場所に行くことができない。

7 コロナ期を経て、今後の課題や取り組み



<回答より考察>

最多の回答は「危機管理対策の策定」であった。大地震等の天災への対策は、阪神淡路・東日本・熊本・能登などの震災の経験から継続的に策定されてきたが、想定外のコロナ禍により危機管理対策そのものを根底から再考する必要性を痛感したと考えられる。「情報伝達方法の変更」という回答も多かった。今まで補助的に且つ部分的に使用されていたオンラインの本格的な必要に迫られ、これも「危機管理」の一環として授業・礼拝・連絡・会議等あらゆる場面でハイブリッド化が各校で検討・実施されてきた。やはり多かった回答の「授業や課外活動の見直し」「コロナ前にはなかった新しい活動の検討」は、コロナ禍を逆手に取り新しい教育のあり方を発見する契機としたものである。

一方「在学生の衰えた心身の状態を支える」という回答には、子どもたちの心身に教職員がそれまで以上に敏感に向き合い、キリスト教学校ならではのきめ細かな寄り添いを改めて確認し、より一層の展開を希求していることが見て取れる。コロナ禍に入った直後は一度思考停止もしていた教育環境を、新たな発想で作り直す取り組みが始まっている。

自由記述：コロナ期を経験した学校の変化・気づき

<回答より考察>

コロナ期の経験は、振り返ってみれば、従来当然のごとく行われていた学校行事、(部)活動、授業のあり方などを改めて見直す契機となったという肯定的意見が校種を問わず多くの学校から寄せられた。例えば、小学校からの「コロナ以前には当たり前に行われていたことをより大切に思うことができるようになった」という意見や、中学校からの「対面教育の大切さ」、「生徒が集団の中で学ぶ教育効果の実感」、「毎日全校生徒が集って礼拝を守ることのありがたさ」、「人と人とのコミュニケーションの大切さ」などを改めて気づかされたという意見である。

コロナ期を経て「コロナの副産物」あるいは「コロナ効果」としてのメリットとしては、やはり小中高大いずれの校種においてもオンラインの活用が進んだことが挙げられた。オンライン授業やICT環境の整備と活用などである。学校側としては結果的にこのようなメリットもあったが、児童、生徒、学生にとっては大きな試練の時であったことも確認できる。コロナ期を通して、「人との距離を上手に取れなくなって子供たちが増えているように思われる」という意見にそれが現れている。

コロナ期に学校は必要に迫られ、できる限りの(時に疲弊を感じざるを得ないほどの)対応を行ったが、その時と同じような対応を今なお保護者が要求してくるケースもあり、教職員の働き方改革と併せて、保護者対応に苦慮しているという意見もあった。

キリスト教学校としてやはり大切なのはキリスト教の精神に基づく人格教育である。人と人とが共につながり、ふれあい、学び合っていく、それらは人格教育に欠かせない点である。改めてこのことに気付かされたという意見が多いことから、キリスト教学校として「対面」で学ぶことの意義を改めて再確認できたことは重要であったといえる。同時に「コロナ副産物」としてのオンラインやICTの有効な活用を進めることは、今日、合理的配慮を必要とする児童、生徒、学生にとっても学びの選択肢が増えることになり、今後もその充実がどの校種においても求められていくであろう。

自由記述から伺い知れたのは、コロナ期を経験したキリスト教学校が、ニーバーの祈りの言葉を用いれば、「変えられるものを変える勇氣、変えられないものを受け入れる冷静さ、そして両者を見分ける知恵」をますます必要としているということである。

回答一覧を掲載しています。
(学校名、回答者名は不掲載、
固有名称等は一部編集・割愛)
*閲覧はURL、QRコードから

<https://00m.in/rLGDW>



